■ 研究論文

明治大正期の月ヶ瀬梅林の空間的变化

Spatial changes of Tsukigase plum grove during the Meiji and Taisho eras

水谷 知生* 植田 拓仁**

Tomoo MIZUTANI Hiroto UEDA

Abstract : This article presents the spatial changes in Tsukigase plum grove, which would have changed considerably due to the decline in demand for 'Ubai' (a type of plum artifact) after the beginning of the Meiji era. The distribution of plum grove at the beginning of the Meiji era is shown in the 1887 map, and that of plum grove during the Taisho era is shown in the 1921 map. By overlaying these maps and the topographic map on the GIS, changes in plum distribution at Tsukigase from the early Meiji to the Taisho era are clarified. Significant plum losses occurred in Nagahiki, Momogano and Tsukise, while losses in Oyama and Dake were smaller. While plum trees were shrinking, the number of visitors has increased since around 1885. However, from the perspective of visitors, it may be said that efforts to keep the plum trees along the main road to visit and in the view range from major viewpoints might keep the Tsukigase plum grove worth visiting until the time of Taisho era.

Keywords : Tsukigase, plum grove, cultural landscape, GIS

キーワード：月ヶ瀬，梅林，文化的景観，GIS

1. はじめに

(1) 研究の目的と背景

地域の自然条件と歴史的背景が結びついた生業がうみだす景観は、重要文化的景観や世界農業遺産として評価を得て、ツーリズムの対象として利用が図られている地域もある。このような生業の景観を名所として位置付け、維持できるかは、景観要素を構成する主体である地域住民の動向が大きな影響を与える。この点について、農業景観の保護手法についての論考²⁾、梅林景観の名所化とその維持に関する論考³⁾など、景観の維持に果たす生業の担い手の役割に視点が置かれ、検討されてきている。

本研究で対象とする月ヶ瀬梅林は、近世後期に、生業としての梅樹栽培から名所が成立し、その後、名所の維持を図る努力が続けられてきた地域である。現在は生業としての梅の栽培はほとんど行われておらず、生業によって成立する景観の維持継承はなされていないが、1933（昭和8）年『日本案内記近畿編下』では、1頁の地図とともに紹介され、昭和初期まで梅の名所とされ続ける。近世後期からの梅林の規模の推移を明らかにし、生業により成立した景観の維持継承の課題の検討の基礎資料とする。

(2) 月ヶ瀬梅林の経過

奈良県の東北部、京都府と三重県に接する奈良市月ヶ瀬とその周辺では、江戸期に紅花を染料として使う際の色素定着のための材料として烏梅の生産が盛況となり、18世紀後半には月ヶ瀬村一帯は烏梅生産のため梅樹の植栽が急速に進んだと推測されている⁴⁾。『月ヶ瀬村史』によれば、文化文政期（1800～1820頃）は最盛期で十万本近くの梅樹がみられたが、明治初年から、化学染料の輸入が進み、烏梅の需要は急落し、その生産量は減少し、梅樹は伐採されたり、茶畑や桑畑に切り替えられていったという⁵⁾。梅林の規模が拡大した時期について水谷（2020）は、烏梅の売価の変動との関係から推定し、売価が1850年代から急騰し1870年代後半には急落することから、幕末から明治最初期の間に梅樹の植栽が進み、梅林の規模が最大になったことを明らかにしている⁶⁾。

渓谷を中心とした梅樹の広がりは、1830（文政13）年に斎藤拙堂が訪れ、1851（嘉永4）年の『月瀬記勝』の刊行を機に名所としての声価が高まり、明治期に入ってから人々の来訪は増え、小野（1999）は1889（明治22）年の奈良柳生月瀬間の新道開設、1890（明治23）年以降の関西鉄道と大阪鉄道の延長と広告宣伝により、来訪者の大幅な増加がみられたことを示している⁷⁾。

その後、1922（大正11）年3月に史蹟名勝天然記念物保存法により国内での名勝指定の最初のグループの一つとして「月瀬梅林」が指定される。明治初期の烏梅の売価低落以降、梅林の物理的規模は減少していったと考えられるが、名所としての価値づけは進んでいった。

(3) 調査手法

生業で成立した月ヶ瀬梅林という名所について、明治期以降、

図－1 旧月ヶ瀬村の範囲とその周辺の集落
（赤く着色した部分が旧月ヶ瀬村。地名は明治初期の村名、境界は農業集落境界データを使用、基図は地理院地図陰影起伏図）

*奈良県立大学地域創造学部 **株式会社キャビック

梅林の規模の変化とその維持に関わって生じた事象をできる限り一次資料をもとに明らかにする。

まず、斎藤拙堂が訪れた時期や明治初期の規模と比べ、それ以降、梅林の規模が縮小し梅樹数が減少したとの記録はあるが、空間的な変動の内容は明らかではない。このため、梅林の空間的広がりを示した図面の比較により変化量と変化内容を明らかにする。

また、梅林の規模が縮小する中で、名所としての景観がどの程度維持されていたのかについて、明治、大正期の紀行文や案内書の記述内容から検討する。

検討する期間は、明治期以降、名所としての景観を維持していたと言える 1922（大正 11）年の名勝指定までの間とする。

2005（平成 17）年に奈良市に編入される以前の月ヶ瀬村（「旧月ヶ瀬村」とする）の範囲が本稿の主な検討対象であり旧月ヶ瀬村と周辺の旧村それぞれの位置を図－1 に示した。旧月ヶ瀬村は 1889（明治 22）年に添上郡尾山村、石打村、長引村、桃香野村、月瀬村により発足するが、発足当初は「月瀬村」であり、1889（明治 22）年以前の月瀬村との区別がつかない。このため、本稿では、1889（明治 22）年以前の月瀬村の範囲を示す場合に「月瀬」「月瀬村」と記し、旧月ヶ瀬村の範囲を示す場合は「月ヶ瀬」「月ヶ瀬村」と記すこととする。

2. 地図でみる月ヶ瀬の梅林の広がりとその変化

（1）検討可能な図面の所在

明治初期の月ヶ瀬の梅樹栽培地が最も拡大したと考えられる時期の空間的広がりを示す平面図として、水谷（2020）は奈良県行政文書『廿八年改 月瀬梅林一件 添上郡役所文書』、奈良県立図書情報館蔵にある「梅林略図」（「大阪府添上郡月瀬村尾山村長引村桃香野村・山辺郡嵩村遅瀬村 梅林略図」）を検討している⁸⁾。この図は、作成年、作成目的が示されていないが、図示された内容、同じ簿冊に綴られている他の文書との関係から、1887（明治 20）年の早い時期に「梅溪二係取調書」の添付図面として作成されたとしている。1874～76（明治 7～9）年に行われた地租改正に際し、畑として地価を算定された梅樹の栽培地が、その後の烏梅の売価急落により、収益の実態に合わない高い地価となっているため、地租改正時に梅林としていた土地を特定し、地価の軽減を要請する目的で作成された図であることが示されている。

地租改正の時期である 1874～76（明治 7～9）年頃の梅林の様子について水谷（2020）は、1850 年代以降、明治初期までの間が月ヶ瀬及びその周辺での烏梅の生産が最盛期を迎えた時期であることを明らかにしており⁹⁾、「梅林略図」には最盛期の梅林の空間的広がりが示されていると考えられる。

「梅林略図」に示された月ヶ瀬の梅樹は、その後、烏梅の売価急落後には伐採されたり、茶畑や桑畑に切り替えられ、大きく変化したとされる。その後の梅樹の分布状況については、1922（大正 11）年に名勝「月瀬梅林」が指定された際の平面図が参考となる。当該図面は文化庁所蔵の『自大正 11 年 3 月 8 日 史蹟名勝天然記念物指定 第 3 の 3 冊』（以下「名勝指定関係簿冊」とする）に綴られた「奈良県 月瀬梅林 地籍図」（以下「名勝指定地籍図」とする）が確認できる。この図は、月瀬梅林の名勝指定作業のために 1921（大正 10）年 9 月に奈良県から内務省官房地理課に送付され、その後のやりとりで数度の修正を経た図面である。1920 年頃に梅樹があった土地とかつて梅樹があって荒地となっている土地を具体的に示した図であり、「梅林略図」と「名勝指定地籍図」を用いることで、月ヶ瀬の梅林の空間的広がりの変化を検討することが可能と考えられる。これら 2 図に示された梅樹がある土地それぞれについて GIS を用いて地形図上に図示し比較することにより、この間の梅林の空間的变化を検討する。

図化には QGIS を用いた。

（2）「梅林略図」での梅樹の分布

「梅林略図」は、1887（明治 20）年の早い時期に作成された図であり、添上郡月瀬村、尾山村、長引村、桃香野村、山辺郡嵩村、遅瀬村の範囲について、①梅林、②畑、③田、④山、⑤川が塗り分けられ、そのほか⑥道、⑦人家所在地、⑧村界、⑨郡界、⑩国界が図示されている。着色された部分のうち梅林として着色された土地には地番が記載されており、畑、田、山林として着色されている土地には地番は記載されていない。

この図で梅林として着色されている土地を地形図上で特定し、GIS 化を行ったが、図に示されている川、道路、集落、田と梅林との位置関係、現在の地番との位置関係を参考にして位置を特定した。尾山と月瀬については明治初期に作成された地租改正地引絵図（「大和国添上郡尾山村三千分一地図・地租改正地引絵図、明治 11 年 2 月」）、「大和国添上郡月瀬村地図、地租改正地引絵図面、明治 13 年 4 月」¹⁰⁾）に地番が示されており、これも参考として梅林の位置を特定した。「梅林略図」では土地の規模や形状がラフに示されているため、位置がほぼ特定できた土地であっても、その規模、形状の特定は困難であった。特に桃香野については、4 ケタの漢数字で表記されている地番が多く、漢数字を図に書き込むために各地番の大きさが実際よりかなり大きく図示され、梅樹の分布範囲が過大に表現されている可能性が高い。このため、1/20000 地形図「月瀬村」（明治 25 年測図）に示された集落の範囲を参考にして図化した。図－2 が作業によって得られた、「梅林略図」に示された明治初期（1875 年頃）に梅林と区分された土地の分布図である。赤の部分が梅林とされた地番で、梅樹がある程度あったと考えられる土地である。

（3）「名勝指定地籍図」での梅林の範囲

「名勝指定地籍図」は、文化庁所蔵の「名勝指定関係簿冊」に綴られているが、表題は記されておらず、「大正十一年九月十三日奈良県教発第五八二四号添付」（大正十一年は大正十年の誤記であろう）の記載がある。「名勝指定関係簿冊」には、1921（大正 10）年 9 月 13 日付の奈良県から内務大臣官房地理課あて送付文書があり、「曩ニ相葉内務属本県へ出張ノ御御申聞ノ添上郡月瀬勝地梅林ニ関スル所有者氏名等調査書並図面（一葉）別紙ノ通及送付候条至急勝地トシテ御指定方御取計相成度候也」と記されている。内務省職員が名勝指定の関係で奈良県に出張した際に月ヶ瀬の梅林の所有者調査書と梅林の図面の作成を依頼し、奈良県が送付した図面であることが確認できる。所有者調査書は月瀬村役場の野紙で作成されており月瀬村が作成し県に提出されたものであり、図面も同様に月瀬村で作成されたものと考えられる。

「名勝指定地籍図」は、2500 分の 1 程度の縮尺で描かれた図面で、①田、②畑、③宅地、④山林及雑地、⑤梅林荒地に塗り分けられ、河川、道路、境界が図示されている。②の畑と⑤の梅林荒地については、「畑トアルハ全部梅畑ナリ 梅林荒地トアルハ以前梅畑ナリシモ現今ハ伐採セラレ目下ハ荒蕪地ナリ」と記された付箋が貼付されている。この図は、作成時点で梅林であった土地に加え、以前に梅林であった土地も含めて図示したものである。畑、梅林荒地には地番が記載されており、その他の地目の土地には地番は記載されていない。田や山林及雑地も図示されているが、梅林と梅林の間にあるものなど、梅林の位置関係を示す上で必要なもののみ図示していると考えられ、畑、梅林荒地として地番がふられている土地は、月瀬村もしくは添上郡が名勝指定範囲と想定した範囲と考えられる。最終的に名勝として指定された範囲には梅林荒地、つまり以前梅林であった土地は含まれていない。

図で畑、梅林荒地と区分されている土地を現在の地形図上で特定し、GIS 化を行った。図化に際しては、畑、梅林荒地と河川や道路との位置関係、（2）で図化した「梅林略図」での地番など

図－2 「梅林略図」における明治初期（1875 年頃）の梅樹分布（赤色が梅林，地名は明治初期の村名，境界は農業集落境界データを使用，河川名は『月ヶ瀬村史』による。無着色部分が旧月ヶ瀬村，基図は基盤地図情報，地理院地図の傾斜量図，陰影起伏図より作成）

図－3 「名勝指定地籍図」における大正期（1920 年頃）の梅樹分布（赤色が梅林，緑色が梅林荒蕪地。他の注釈は図－2 と同じ）

を参考とした。図－3 が作業によって得られた畑，梅林荒地と区分された土地の分布図である。赤色が畑と分類された土地，すなわち梅畑で，緑色が梅林荒地と分類された土地，つまり以前に梅樹があった土地である。

（4）両図からみた梅林の規模の変化

図－2，図－3 を比較すると，梅林面積と分布の違いがあまりに大きい。特に名張川の渓谷部から離れた月瀬，桃香野，長引の梅林の規模の変化が著しい。先に述べたように，「梅林略図」は梅樹栽培が最も拡大した幕末から明治初期の月ヶ瀬村の梅林の広がりを示し，「名勝指定地籍図」は，大正期に名勝指定を想定した梅樹の分布を示している。図－2 での梅樹の分布は，名張川によって開析された谷の底部から斜面に広がっている。桃香野では

図－4 1892（明治 25）年測図 1/20000 地形図「月瀬村」における果園，茶畑，その他の畑地の分布

名張川支流の葛川、矢川、滝谷川に沿いに、月瀬では東谷川と清水川に挟まれた台地上にも分布し、尾山・長引では、名張川の谷斜面から台地上にかけて梅樹が分布している。図－3では、梅樹は名張川の底部から斜面と矢川などの支流に沿った斜面などに分布が限られ、この間に「梅林略図」に示される梅林は大幅に消滅したとみられる。図－4に、1892（明治25）年測図の2万分の1地形図での果園、茶畑とその他の畑地の分布を示している。当時の地形図の土地利用の凡例では、桑畑、茶畑、果園が記号で表記され、無記号はその他の畑地となっている。名張川の谷の底部と谷斜面、矢川、滝谷川沿いには果園（梅）が記されているが、それ以外には果園は記されていない。地形図の縮尺上、ごく小規模な梅林は表記されていない可能性はあるが、この時期までに梅林の規模は大きく縮小している。

1852（嘉永5）年に月ヶ瀬を訪れた松浦武四郎が『梅嵯峨誌』¹¹⁾の中で、1850年頃以降、烏梅売価上昇にともなって拡大した梅樹栽培地は、それまで梅樹が植栽されていた他の作物が育たない地ではなく、作物畑を梅樹に切り替えて栽培を拡大していった場所だと記している。地租改正により畑として地価が算定され、地租を納めなければならない状況では、烏梅の売価が低下した後は、梅以外の作物畑として活用できる畑に梅樹を残しておく理由はなかったであろう。

3. 明治初期から大正期の梅樹の状況

（1）明治初期の梅樹の伐採時期

2章でみた明治初期以降の梅林の規模の変化はどの時期に生じたのだろうか。1870年代には烏梅の売価が下落し、1883（明治16）年に月ヶ瀬を訪れた三蔭顕遠の『花笠日記』にある、「われもわれもと梅伐倒し、根を掘りとりて次々茶の種を蒔おろして……」¹²⁾との記述から、この頃には急激に栽培作物の転換が図られていたとみられる。『月ヶ瀬村史』では、1886（明治19）年の「梅林維持規約書」に記された「梅樹は月に減じ衰耗は歳に加ふ、黒梅の業将に地に墮んとす」を引用し、急激な梅樹の消失を伝えている¹³⁾。このような梅樹消失の動きに危機感を持った五ヶ村戸長¹⁴⁾の脇野喜郎は、梅林維持のため1885（明治18）年に大阪府（当時奈良県は大阪府に編入されていた¹⁵⁾）に請願を提出し、また、1887（明治20）年の奈良県再設置後、1888（明治21）年に地租軽減の請願を行い、1889（明治22）年に地価修正が行われている¹⁶⁾。この地租軽減のための請願書類の一部として作成されたものが「梅林略図」であった。一方で、村内での梅林保存の動きは、「梅林維持規約書」が1886（明治19）年に作成され、梅林所有者に梅林の維持を求めている。この規約では、梅林所有者は梅樹を伐採しないこと（第3条）、もし伐採した場合には賠償として1株の伐採に対し5株以上を補植させることがある（第

5条）と規定している。また、各村に「梅林取締」を置き、梅樹の株数を調査する（第6条）など、梅樹の伐採を防ぐことに腐心している¹⁷⁾。その後、1890（明治23）年2月に改めて「梅林規約書」が作成され¹⁸⁾、23条に及ぶ規約について、「確守履行スルノ証トシテ各自記名捺印スル」として、梅林所有者が連名で捺印している。

『月ヶ瀬村史』に掲載されている「五ヶ村梅産表」では、烏梅の相場は1872（明治5）年に一駄7円73銭だったものが1877（明治10）年に半額近い4円74銭に、1884（明治17）年にはさらに半額の2円7銭に低下している²⁰⁾。この動きと図－2、3、4からは、名張川の谷の底部から谷斜面と矢川、滝谷川沿い以外の梅樹は明治10年前後から明治20年代前半までには伐採され、そのような状況を受け、「梅林維持規約」「梅林規約書」が作成され地租軽減の請願がなされたと考えられる。その後、名張川の谷斜面でも桃香野に分布していた梅樹は大正期までに大幅に消失している。

1890（明治23）年の梅林規約書に記名した者の数と当時（1889（明治22）年）の各大字の戸数とを比較したものが表－1の上部である。梅林所有者として梅林規約書に記名している者を各戸の代表と考え、その当時の各大字の戸数に対する記名者数の割合をみると、各大字の戸数のうちどの程度が梅樹を所有していたのかが明らかとなる。1890（明治23）年時点では、梅樹から他の用途への転換が進んでいたとはいえ、尾山、桃香野では約7割、長引では8割、月瀬では9割近くの世帯が梅樹を所有しており、各戸が梅樹の全てを放棄したわけではなかった。

（2）明治中期から大正期にかけての梅樹の変化

梅林規約書が作成されたと同時期、1890（明治23）年に、三重県上野の田中善助が私費を投じて月瀬保勝会を発足させ、梅林保護の民間の動きが始まる。しかし、保勝会発足直後には「老樹年々百本近く枯死するものあり。補植、管理、施肥の対策には応じられない……」²¹⁾との記録がみられ、梅樹の伐採をしないことを規約書で確認するだけでは梅樹の維持が図れるわけではなく、生産価値を失った梅樹の維持の困難さが記されている。

一方で観梅を目的とした来村者の数は具体的な数値はないが、「明治20年頃から漸増し、26年、27年などは大字月瀬に投宿する者、1日に千人を越すことも数回あり」²²⁾との記録がみられ、梅樹維持が困難になる反面で来訪者が増加するジレンマに陥っていたことがうかがわれる。

保勝会は、入会時の会費収入と寄付が財源で、厳しい財政状況から活動は頓挫したとされる²³⁾。田中は1903（明治36）年には、保勝会名で「月瀬独案内」²⁴⁾を発行し10銭で頒布しているが、明治20年代には保勝会として収入を得て保全事業を進める意識

表－1 梅樹所有者の推移

	尾山	長引	月瀬	嵩	桃香野	計
1890（明治23） 梅林規約書記名 者数 ①	75 名	48 名	40 名	16 名	95 名	274 名
1889（明治22） 戸数 ¹⁹⁾ ②	105 戸	60 戸	46 戸	19 戸	136 戸	
①／②（％）	71%	80%	87%	84%	71%	
1922（大正11） 名勝指定時継続 所有者数 ③	38 名	15 名	27 名	15 名	42 名	137 名
同・新規所有者 数	3 名	8 名	0 名	0 名	2 名	
③／①（％）	51%	31%	68%	94%	44%	50%

図－5 明治初期から大正期の梅林面積の変化
「梅林略図」と「名勝指定地籍図」を現在の地形図上に示し（図－2、図－3）、GISで算出した面積。Cは梅林略図で梅林とされた面積からAとBの面積を除いた面積としている

はなかったようである。

上記のような梅林維持の取り組みがあったが、大正期の梅林は図-3でみたとおりの規模となっている。梅樹がある土地といっても、梅樹の密度、量は様々であったと考えられるが「梅林略図」と「名勝指定地籍図」で梅樹があった土地の面積をGIS上で計算し²⁵⁾、大字ごとに比較すると図-5のとおりである。Aは、1922(大正11)年の名勝指定に先立ち月瀬村が作成した図での梅林の土地の面積、Bは、その図で梅林荒蕪地(荒地)とされた土地の面積である。

図-5で示したA、B、Cの面積は、大まかに言えば、Cが明治初期に梅樹があり、その後他の土地利用となった面積、Bが明治初期に梅樹があり、その後伐採され、あるいは枯死したが他の用途に利用されず荒地とされていた土地の面積、Aが明治初期から大正期まで梅樹が存在し続けた土地の面積である。長引、月瀬、桃香野では梅樹の減少が多くみられたこと、一方、尾山、嵩では梅樹が比較的維持され、尾山では梅樹が消失した土地でも梅林荒蕪地が多く、大字によって梅樹の消失の動きがかなり異なっていた。

(3) 大字による梅樹残存状況の違い

大字による梅林の残存動向の違いは、表-1の下部で示した1890(明治23)年の「梅林規約書」の記名者と1922(大正11)年の名勝指定時の名勝の土地所有者²⁶⁾、つまり梅樹のある土地所有者を比較することでも明らかとなる。1890年時点で梅樹を有していた土地所有者名と1922年時点で梅樹を有していた土地所有者名を比較し、同一人が所有しているものと同一苗字の者が所有しているものを継続して梅樹を所有している世帯とし、継続所有者の比率を示した。1890年時点では梅樹を所有していなかった者が1922年時点で現れており、土地を入手して新たに月ヶ瀬に居住した者と考えられる。長引に多くみられるが全体としてはわずかである。

月ヶ瀬全体では1890年時点で梅樹を所有していた世帯の半数が1922年時点でも所有している。大字による違いが大きく、長引と桃香野では6割から7割の世帯が梅樹の所有をやめている。長引と桃香野で多くの梅樹がこの間に消滅したことは図-3、図-4でも示される。しかし、月瀬では図-3、図-4では東谷川と清水川に挟まれた台地上の梅樹など面積の大幅な減少がみられるが梅樹の所有者の減少は3割程度と少ない。尾山では梅樹を所有する世帯数は半減しているが、梅樹の面積は世帯数の減少ほど顕著ではない。嵩では、この間に梅樹を消失させた世帯はほぼない。

月ヶ瀬の各大字の集落は、名張川の谷斜面の上部から台地上に立地していた。そのうち、月瀬では全ての世帯が名張川の谷斜面に階段状に立地し²⁷⁾、その多くの世帯が梅樹を保持していたため、台地上の梅樹を伐り、他用途とした後も梅樹を有する世帯数はあまり減少しなかったと考えられる。尾山は梅樹を有する世帯数は減少したものの梅林面積はさほど減少していない。台地上に梅樹を保有していた世帯は他用途としたが、谷斜面から台地端部に梅樹を保有していた世帯はこれを維持し、この梅樹の面積が大きかったため、世帯数の減少に比較して面積の減少が少なかったと考えられる。

明治中期に梅林規約で所有者に梅樹維持の協力を求めたものの、それ以降、長引、桃香野では梅樹の栽培をやめる農家が多く現れ、月瀬では名張川の谷斜面以外の梅樹は大きく減少した。一方、谷斜面に梅樹が栽培されていた尾山、嵩では、明治初期から1922年の名勝指定までの間、梅樹の規模は一定程度維持されたといえる。

「名勝指定地籍図」では畑と梅林荒蕪地は色分けされている。しかし、この図とともに月瀬村によって作成され、内務省に送付

された「梅林反別調」では、梅林の一筆ごとの地目、地番、面積、所有者が記されているが、畑と梅林荒蕪地は区別されていない。「名勝指定地籍図」と「梅林反別調」は、2章(2)でみたように、内務省職員が出張に来た際に求め、それに応じて月瀬村で作られた図と調査書である。その図面と調査書に梅林荒蕪地も含んでいることは、名勝指定範囲として、月瀬村、奈良県は当初は梅林荒蕪地も含めることを想定していたと考えられる。梅林荒蕪地は、桑、茶など他の作物に切り替えられた土地ではなく、梅樹が伐採され、あるいは枯死した後未利用となっていた土地で、月瀬村ではこの土地も保全対象と考えている。前述の梅林規約書では所有者に対して伐採をしないよう求め、伐採した場合には1株につき5株の植栽を求めていることから、梅樹が伐採され、あるいは枯死し荒地となっている土地は名勝の範囲に含め、梅樹の植栽を誘導する意図があったと考えられる。内務省と奈良県との間のやりとりでは、1921(大正10)年10月31日付けで添上郡長から地理課長へ内訳書を送付しているが、この時、梅林と梅林荒蕪地を別々に集計しており、梅林のみを名勝として指定する方針がはっきりしたとみられ、月瀬村の考えは貫徹しなかった。

4. 来訪者にとっての梅林の価値の変化

地図上では明治初期から大正期にかけて大きな変化をみせた梅林の規模であるが、明治20年頃から増加していったといわれる来訪者にとって、その変化はどのような意味を持っていたのであろうか。幕末から月ヶ瀬への来訪者が残した記録は出版されたものも多く、梅溪史料編輯室による『香世界懷古』に主な来訪者の記録がまとめられている。1830(文政13)年の齊藤拙堂、翌年の頼山陽の来訪、1852(嘉永5)年の拙堂の『月瀬記勝』刊行以降、月ヶ瀬への来訪者は相次ぐが、明治20年代以降、人力車と鉄道という交通手段の変化により来訪者は増加する。1章でふれたように1889(明治22)年の奈良から柳生を経て月瀬に至る新道の開通、1892(明治25)年の伊賀上野-月ヶ瀬の道路改良の完了(尾山の中腹を斜めに横切る新道の開通を含む)により、人力車での来訪が容易となったこと、1890(明治23)年の関西鉄道草津柘植間の開通、1892(明治25)年の大阪鉄道湊町奈良間の開通など、鉄道と人力車を組み合わせることにより、明治期の月瀬は大衆行楽地としての面を持つようになったとされる²⁸⁾。

1893(明治26)年2月には名張川に月ヶ瀬橋が架橋される。それ以前は舟で川を横断する必要があり、上流下流を往復して川から梅を探勝した紀行の例も多いが、明治20年代以降は橋を渡って川の兩岸のみどころを巡る、ある程度パターン化されたルートに収斂される。明治中期と大正期に月ヶ瀬を訪れた紀行文で、比較的詳細にルート、梅樹の状況を記しているものとして、1898(明治31)年来訪した田山花袋による「月瀬紀遊」²⁹⁾、1925(大正14)年来訪した野口米次郎による「月瀬の梅を見る」³⁰⁾の2点をとりあげ、二時期の来訪者による梅林の捉え方を検討する。月ヶ瀬の主要な興味地点の名称、主なルートは図-6に示した。

(1) 明治中期(1898)の梅林：田山花袋「月瀬紀遊」から

田山花袋は月ヶ瀬東方の石打から長引に入り、「一目万本」と書いた古札のある場所に到ったと記しているが、天神森付近であろう。ここから見える溪谷について、「梅、梅、見ゆる限りところとして梅ならぬはなし。われは曾てこの地を想像したるが、かく山の迫り、水の清く、梅の多き処ならんとは思ひも懸けざりき」と記している。田山は、多くの梅がある印象を受けているが、茶店の老翁の話として、頼山陽が訪れた頃あるいは老翁が幼かった頃には比べものにならないくらい「随分盛ん」であって、「嵩、長引、遅瀬など、此処より見れば、唯々真白というより外に言葉なき程」であったとも記している。

この後、花袋は大観坂を下り鶯谷、月ヶ瀬橋を渡り桃香野に向

かう。「行けば行くほど、梅は愈路のほとりに多くあらわれ」と記し、奥の谷に着く。奥の谷の樹は皆百年來の古木のみと記している。不動の滝の上の梅を見て月瀬の宿に入る。翌日、宿から「梅花の間にうねりたる路を下り」、溪流が見える少し開けた場所（一目万本であろう）にでる。その下には500株ほどの梅が咲き、名張川の向こうの鶯谷、一目千本、尾山の谷々は「皆梅ならむはなく、皆白からざるはなし」と記している。その後梅花の間を通過、坂また坂の細道を下り、月ヶ瀬橋を渡り、新道を登って尾山に向かい、別れを惜しみながら月ヶ瀬を去る。

花袋の表現は誇張した点も多いが、訪れたルートでの梅林の景観は、花袋にとって十分評価できるものと捉えられている。

（2）大正期（1925）の梅林：野口米次郎「月瀬の梅を見る」から

野口米次郎は東京から鉄道を利用し、伊賀上野駅で下車、その後自動車で月ヶ瀬に向かい尾山に到着。「月瀬案内」³¹⁾を手にしているが現地の案内人と合流し一日八景に向かう。その途中で風によってきた梅花の香りに驚いている。一日八景からの風景に、野口の子が「なんだこればかりの梅の木か」と叫ぶと、案内人は、昔は此辺梅花ならざるは無しであったと語る。昔の景観を語る点は花袋に対する茶店の老翁と同様である。野口は香りに満足し、百本に足らない梅の木で十分としている。真福寺、三学院を訪れ、大観坂、一目千本に至る。「名は千本でも今日存在する梅樹の数は多寡の知れたものだ」と梅樹の多さは感じていないが、「満開の時に山上から梅林を眺めたならば、白雲が山腹に憩うとでも形容したくなるであろう」と評価している。鶯谷を経て月ヶ瀬橋を渡り、月瀬方面へ歩き一目万本に向かう。「一目万本から下の方を眺めると一面の梅林が眼前に広がって居る」とするが、名前が勝ちすぎているとも記す。総見山に上り「遠望は掛値なしに絶勝」とし、山を下りて名張川に添って行き、奥の谷では、「梅樹が両側から道を抱えて、満開の時ならば必ずや雪の隧道を潜るの感を

人に与える」と梅樹のトンネルを描写している。梅香野の村に入った所に梅の古木をみて、この辺りの梅林を「数の上からいっても又木の形から見ても、これまで見て来た梅林以上にたち優って居る」と評価する。その後月瀬に戻って宿に入る。

翌日、一目万本から下る道の両側にある茶畑の光景も愉快だと記し、月ヶ瀬橋を渡り、新道を尾山に上り帰途に着く。月ヶ瀬に来た時には多少失望の感なしではなかったが、去るにあたって「数百里かけて廻って来たことを喜ばざるを得なかった」と満足している。

文章の端端から野口の梅の花への強い思いが伝わり、若干パイアがかかっているともとれるが、大正期には梅樹がかなり減少している中で、野口が訪れたルートでは、眼下や道の両側に広がる梅樹の景観は評価できるものであったといえよう。

ただし野口は、烏梅の需要が減ったことで梅樹が伐られ、保勝会が名所としての維持を図っていることを述べた上で、「このままにして置くとこの名所も亡びて行く。……この維持は単に保勝会や県庁だけの仕事でない。立派な道路を作ったり「梅の木を保護しましょう」の標札を懸るなどの事は二次的のもので、主要な保護策は他にあらねばなるまい」と述べ、梅樹の維持には住民の動きが欠けていることを暗に語っている。このような感覚が月ヶ瀬でのどのような体験に起因しているかははっきりしない。

（3）明治中期・大正期の観梅ルートと梅樹の分布

30年弱の間隔をおいた花袋と野口の月ヶ瀬来訪であるが、ルートは共通する点が多い。尾山から入り天神森、大観坂、一目千本、鶯谷を経て月ヶ瀬橋を渡り、月瀬の一目万本、（総見山）、桃香野に向かい、奥の谷に至る梅樹のトンネル、帰りは尾山の谷斜面の中腹の新道で尾山に戻っている。

1903（明治36）年の田中善助の「月瀬案内」では、月瀬の全勝を漏れなく見るためのルートとして以下をあげている

図－6 明治大正期の月ヶ瀬の見どころ・標準的ルート（青線）と梅樹の位置関係

紫色：明治初期の梅樹分布、緑色：大正期の梅林荒蕪地、薄赤色：大正期の梅林、基図は鉄道省（1933）『日本案内記・近畿編下』挿図「月瀬」。基図をラスターデータとして読み込み、梅樹分布をオーバーレイしているため、基図の精度により多少のズレがある

図-7 一目千本（上）及び一目万本（下）からの可視範囲と明治大正期の梅樹の位置関係
 灰色：各視点からの可視範囲、紫色：明治初期の梅樹分布、緑色：大正期の梅林荒蕪地、薄赤色：大正期の梅林、基図は図-6 と同じ

<往路>（尾山）真福寺-天神社-三学院-大観坂-（長引）一目千本-鶯谷-月瀬橋-（月瀬）一目万本-双美山-裏の谿-（桃香野）奥の谷-龍王滝-天井谿

<復路>桃香野-月瀬橋-新道-尾山

花袋は真福寺、三学院に寄らず、双美山（総見山）に上がっていないし、野口は桃香野の奥まで行っていないが、基本的には「獨案内」で案内しているルートを進んでいる（図-6 青線参照）。「梅林略図」と「名勝指定地籍図」に示された梅樹の分布も図-6 に示した。図-6 では明治初期に梅林であったがその後大正期には消滅した場所を紫色に、大正期の梅林荒蕪地を緑色に、大正期まで維持されていた梅林を赤色で示してある。

まず、「月瀬獨案内」にあるルートと梅樹との関係を見ると、大観坂から月瀬橋までの斜面、月瀬橋、一目万本から総見山までの斜面、奥の谷付近、梅ヶ谷付近など、赤く着色された部分を通る箇所が多い。この中で例えば奥の谷付近について、花袋は「行けば行くほど、梅は愈路のほとりに多くあらわれ」とし、また、奥の谷の梅樹が古木であることを記している。野口は「梅樹が両側から道を抱え」とトンネル状の梅樹を評価し、古木について「これまで見て来た梅林以上にたち優って居る」と記す。両者とも遊覧ルート左右にある梅樹の印象を強く持っており、遊覧ルート沿

いの梅樹は奥の谷より西側の部分を除けば、明治大正期までその規模が維持されていたことから、来訪者の評価が大きく変化することはなかったと考えられる。

一方で、梅林を遠望する場合について、名張川北岸の代表的視点場として一目千本と南岸の代表的視点場として一目万本をとりあげ、図-7 にそれぞれの位置からの可視範囲と明治大正期の梅樹の分布を図示した。一目千本からは、足下の斜面の梅樹は目に入るが、遠方の可視範囲の多くを占める名張川対岸の斜面は、月瀬橋から月瀬方面に赤い部分（明治大正期の梅林）が点在する程度であり、梅樹の分布は多くなく、また、明治期以降にその範囲は大きく変化していない。花袋が紹介する、以前は比べものにならないくらい「随分盛ん」であって、「嵩、長引、遅瀬など、此処より見れば、唯々真白というより外に言葉なき程」であったとの老翁の言葉には誇張が多く、そもそも嵩や遅瀬に多くの梅樹はみられなかった。一目千本から月瀬方面の可視範囲については、総見山の斜面に紫色の部分が確認される以外には、大正期にかけて大きな梅樹分布の変化は確認されない。

名張川の谷の南斜面の一目万本からの可視範囲の中での梅樹分布の変化をみると、尾山と長引の谷の北斜面の上部に緑色部分（大正期にかけて梅樹が失われた梅林荒蕪地）が目立つ。この部分の

梅樹が大正期にかけて失われることで、花袋が目にし、鶯谷、一目千本、尾山の谷々は「皆梅ならむはなく、皆白からざるはなし」と記した状況は大正期にかけて変化していったと考えられるが、野口も一目万本から対岸をのぞんで「烟雲縹緲隠頭模糊として一幅の絵画のよう」と評しており、斜面にうっすらと白い霞がかかる様子は感じ取っている。明治大正期の梅樹の分布の変化が来訪者が遠望する場合にも致命的な影響を与えたとは言えないが、緑色の梅林荒蕪地となっている箇所の梅樹を回復することができれば、訪れる価値のある梅林空間の維持に寄与したと推定される。

「月瀬獨案内」にあるルートをたどることで、ルート両側の梅樹や、ルート上の眺望地点から梅樹の広がりや体感でき、地域全体として梅樹の量が少なくなった中でも、野口が体感できたような訪れる価値のある梅林の空間を維持できていたと言えよう。

烏梅生産という経済的価値を減じた梅林について、価格が暴落した明治初期以降約 50 年間、大正期までは、訪れる価値のある名所としての価値を維持してきたと言ってよいだろう。

5. おわりに

明治初期以降に烏梅の需要低下によってその姿を大きく変えたとされる月ヶ瀬の梅林について、最盛期の梅林の空間的広がりやの姿とその後の変化を地図上で明らかにした。月ヶ瀬の梅林の最盛期は、文化文政の頃（1810～1830）³²⁾、あるいは 18 世紀後半から 19 世紀初頭³³⁾とされている。栽培面積が拡大された幕末から明治初期の梅樹の分布は「梅林略図」に、大正期の梅樹の分布は「名勝指定地籍図」に示されており、それを地形図上に示すことで旧月ヶ瀬村の梅樹の明治初期から大正期にかけての分布変化を明らかにした。明治大正期に、長引、桃香野、月瀬で梅林の大規模な消失がみられる一方で、尾山、嵩での消失は小さく、大字による違いが明確になった。名張川の谷の底部から谷斜面と矢川、滝谷川沿い以外の梅樹は明治 10 年前後から明治 20 年代前半までには消失し、名張川の谷斜面は比較的梅樹が残されたが、尾山では大正期までに荒地になる箇所も多く見られた。

梅林が減少していく中で、明治 20 年代から交通手段の進展もあって訪問客が増加する。梅樹維持のための所有者の規約を定める動きはあったが、全体として大正期まで梅樹の減少を止めることができてはいない。しかし、来訪者の視点からみると、遊覧ルート沿いの梅樹は桃香野以外ではほぼ維持され、ルート上の眺望地点からの眺望範囲では、一部梅樹は消滅しているものの、うっすらと梅花が広がる様子は維持されていた。結果として大正期まで、訪れる価値のある梅林空間を維持できていたと言える。

月ヶ瀬の梅樹の取り扱いの経過は、生業によって成立してきた景観が、経済状況の変化にもなって維持継承できなくなった状況に明治中期に腐心した歴史である。烏梅の栽培が生業として成立しなくなった 1898（明治 31）年には、梅干の陸軍による買い上げを請願した記録³⁴⁾もあり、生業として梅林の維持を図ることを模索していた。大正期までに物理的な梅林の変化は進んでいたものの、名所としての価値を維持してきたとの結論を得たが、烏梅の価格が暴落した後、梅実の販売がどの程度利益をあげていたのか、梅林規約書や保勝会の活動がどの程度名所としての維持に貢献していたのかは明らかにならなかった。

大正期の後には、第二次大戦、高山ダムの建設と、梅林の規模に大きく関わる事象が生じるが、その後の梅林の変化については稿を改めて検討したい。

なお、本稿で検討した文化庁所蔵『自大正 11 年 3 月 8 日 史蹟名勝天然記念物指定 第 3 の 3 冊』簿冊「月瀬梅林地籍図」は、令和 2 年 8 月 21 日付け 2 受文財第 36 号により開示を受け閲覧したものである。

補注及び参考文献

- 1) 本稿では資料の引用に際して、旧かなづかいは現代かなづかに、旧字体は新字体に変えた。
- 2) 恵谷浩子（2014）：生産と製造が結びついた農業景観の保護手法―日仏の比較―：奈良文化財研究所紀要 2014、70-71
- 3) 七海絵里香・芝田忠典・大澤啓志（2015）：和歌山県みなべ町における観梅の成立過程：ランドスケープ研究 78(5)、443-448
- 4) 梅溪史料編輯室（1999）：香世界懐古：財団法人月ヶ瀬梅溪保勝会、365
- 5) 月ヶ瀬村史編集室編（1990）：月ヶ瀬村史：月ヶ瀬村、972
- 6) 水谷知生（2020）：近世近代月ヶ瀬の梅林空間の変化について：奈良県立大学研究季報 31(2)、45-57
- 7) 小野佐和子（1999）：月瀬梅林の近代における変容について～イギリス湖水地方と比較して～：奈良文化財研究所学報 58、105-120
- 8) 水谷知生（2020）：明治期月ヶ瀬の「梅林略図」に関する考察：奈良県立大学研究季報 30(3)、79-100
- 9) 前掲 6)
- 10) いずれも財務省税務大学校蔵。
- 11) 吉田武三編（1985）：松浦武四郎紀行集（中）：富山房、16
- 12) 三藤遠達（1958）：花笠日記：葛城文庫、30
- 13) 前掲 5)、430
- 14) 石打、尾山、長引、月瀬、桃香野の 5 村の戸長。
- 15) 奈良県は 1871（明治 4）年に大和国一門を範囲として設置されたが、1876 年（明治 9 年）に堺県に編入され、堺県は 1881 年（明治 14 年）に大阪府に編入される。奈良県が再設置されるのは 1887（明治 20）年となる。
- 16) 前掲 5)、978
- 17) 前掲 5)、431
- 18) 奈良県行政文書『廿八年改 月瀬梅林一件 添上郡役所文書』（奈良県立図書情報館蔵）に収められている「明治 23 年 3 月梅林規約書」。
- 19) 前掲 5)、438 より。ただし、嵩については、その時点で月瀬村に所属していなかったため同資料には戸数はなく、1877（明治 10）年ごろの調査として月ヶ瀬村史（872）にあるもの。
- 20) 前掲 5)、975
- 21) 前掲 5)、981、引用であるが元の記述の出典は不明。22) とともに保勝会に関連する文書とみられる。
- 22) 前掲 5)、981、引用であるが元の記述の出典は不明。
- 23) 前掲 4)、381
- 24) 田中善助（1903）：月瀬獨案内：月瀬保勝会、42pp
- 25) 「名勝指定地籍図」で梅林とされた土地は、1922（大正 11）年に名勝として指定された区域である。GIS での面積計算ではその面積は 21.2ha となったが、名勝指定面積は 114 反（約 11.3ha）である。これは図化に際しての誤差とは言えない差であり、月ヶ瀬の各筆の台帳上の土地面積は実態より少なくなっていた可能性がある。
- 26) 1922 年 3 月 8 日付け官報。名勝月瀬梅林の指定告示であり、指定された地番、土地所有者が告示されている。
- 27) 名勝月瀬学術調査準備委員会（1957）：名勝月ヶ瀬：名勝月瀬編纂委員会、106
- 28) 小野佐和子（1995）：新聞広告に現された明治時代の月瀬：ランドスケープ研究 58(5)、9-12
- 29) 田山花袋（1899）：月瀬紀遊、「南船北馬」所収：博文館
- 30) 「月瀬の梅を見る」は、野口米次郎（1925）：坐る人間の評論：改造社所収。本文中に今年満五十歳になるとの記述があり、野口米次郎の生年 1875 年から 1925（大正 14）年の訪問である。同じ文章が「月瀬紀行」として、野口米次郎（1926）：自然禮讃：第一書房にも収められている。
- 31) 木津亀郎（1922）：月瀬案内：伊賀新報社、であろう。
- 32) 前掲 5)、972
- 33) 前掲 4)、367
- 34) 奈良県行政文書『廿八年改 月瀬梅林一件 添上郡役所文書』（奈良県立図書情報館蔵）に収められている明治 31 年 11 月 14 日付け第四師団司令部あて月瀬村長請願書。本村に産する梅干一手買上の特約を願ひ出ている。

（2020.11.30 受付、2021.5.22 受理）